

大洲和紙ドキュメンタリー映像作品で見る和紙の世界

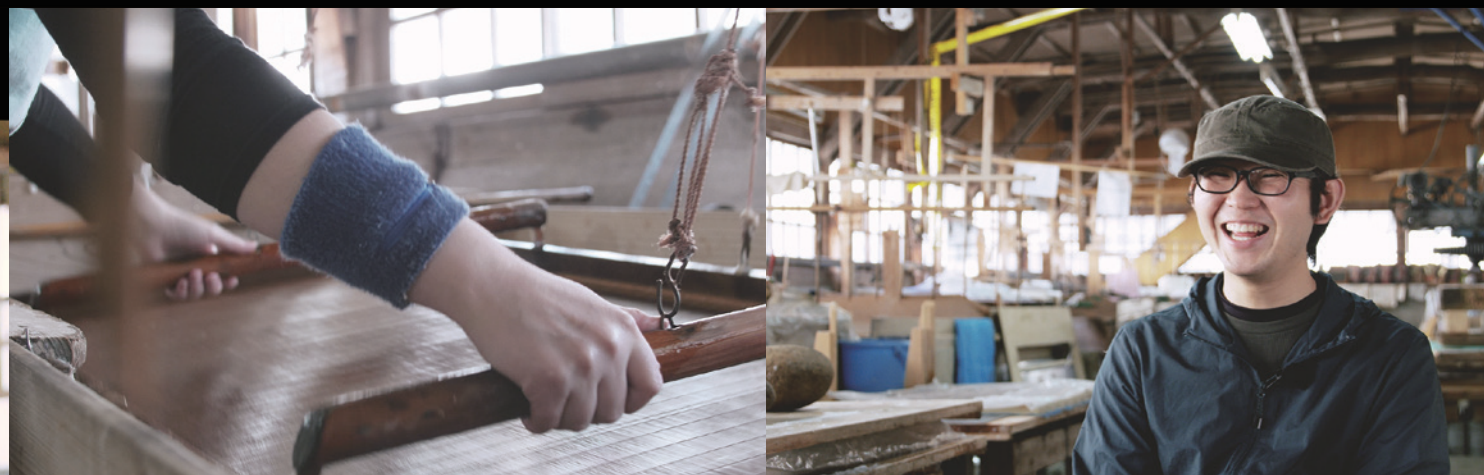
和紙に映る『紙の人びと』

今回の特集ではドキュメンタリー映像『紙の人びと』を基に、天神産紙工場の魅力を伝えます。映像を制作したのは鳥谷恒希^{こうき}さん。松山市出身で、令和元年から小田地区を拠点に活動する映像作家です。天神産紙工場で真摯にものづくりをする職人の姿に感銘を受け、この作品を作ろうと思ったそうです。

かつては大洲藩の収入の8割を占めたといわれるほど盛んにつくられた大洲和紙ですが、現在生産しているのは天神産紙工場を含め2軒のみ。映像は受け継がれてきた高度な技術や職人たちの思いなどを、丁寧につづった貴重なものとなっています。「和紙づくりに自分自身も魅了された」と鳥谷さんが語るように、知っているようで知らない和紙の世界を、鳥谷さんの思いとともに紹介します。



©2021 Ko-ki Karasudani



ドキュメンタリー『紙の人びと』に見る職人の素顔

和紙の日常をきりとる

映像作品『紙の人びと』は、天神産紙工場で行われている昔ながらの手漉き和紙製造の過程と、職人たちの素顔を伝えています。このページに掲載した写真は、全てその映像から切り取ったものです。カメラを回し続けた鳥谷さんは、紙の人びとのどんな魅力を映し出そうとしたのでしょうか――。



ドキュメンタリー映像『紙の人びと』は、天神産紙工場近くを流れる小田川の風景から始まります。場面は工場の外観から、和紙の原料となるコウゾやミツマタを水に浸す晒し場、簾桁で紙を漉く音が響く工場内へと続き、真剣な表情で作業に打ち込む職人たちの姿が映し出されます。

映像は1枚の和紙が何人もの職人の手によって作られる様子を伝えます。鳥谷さんが取材を始めて知ったのは、その工程の多さ。「1枚の和紙を作るのにこんなにも時間がかかっている。全ての工程を収めた」と3カ月かけて撮影を進めました。工場の雰囲気についても、「音とか匂いとか、独特の空気感に魅了された」と言います。職人の手が水をくぐる音や、漉き上げた和紙を乾かすときに刷子でこするやわらかな音が、映像を見る人にまるで工場内にいるような臨場感を与えます。

職人たちの真摯なものづくり

鳥谷さんが「職人の言葉を聞くことで成立する作品」と話すように、作中では職人たちがそれぞれの立場で和紙づくりへの思いを語っています。紙漉きを担当する入社3年目の千葉航太さんは、インタビューで「一人一人が1枚の紙のために作業している。自分が失敗して駄目にし

てしまわないよう、一枚一枚の大切さを感じている」と語ります。これに鳥谷さんは「自分も同じ気持ち。真摯なものづくりをしている皆さんを、きちんとした作品で出したい」と言葉に力が入ります。

中でも鳥谷さんが最も印象に残ったのは、工場で最年長の宮脇吉男さんの言葉でした。宮脇さんは原料を炊く作業の担当で、「自然の材料を使うから、同じ時間、同じように炊いても毎回違う」とその難しさを語ります。また「今後もより良いものを作りたい。若い人たちが頑張っている、その手伝いができるのが幸せ」と思いを伝えています。鳥谷さんは宮脇さんの姿を「仕事に対してストイックでピュアな人」と表現。「自分も『紙の人びと』を最高の作品にしたい」と、思いを膨らませました。

映像で魅力に触れてほしい

鳥谷さんは現在、『紙の人びと』のリメイク映像を作っています。「初めて自主制作した作品は、とても特別なものになった。リメイク版では、もっと職人のすてきな思いや姿を、皆さんに伝えたいと思っている。内子町にはこんなにも素晴らしい人がいること、場所があることを皆さんに知ってほしい」と、思いを語ってくれました。



齋藤 宏之さん Ⅱ 岡第2 Ⅱ

私たちの技術や思いが
丁寧に伝えられた作品

新しい人の流れを作ろうと始めた「屋根裏ギャラリー」で、最初の上映会をしました。和紙を紹介するだけでなく、地元のクリエイターの活躍の場にしたいと、烏谷さんに個展を開くよう提案しました。彼のファンなどが来て、たくさんの人に大洲和紙を知ってもらうきっかけになりました。

『紙の人びと』のリメイク作品の上映会を、新設した「天神館」で開きます。私たちがギルドイング和紙などの新しい挑戦ができるのは、天神産紙工場の職人たちがつないできたしっかりとした技術が土台にあるから——。その深さや思いが伝わる作品なので、皆さんもぜひ見に来てください。



リメイク作品の上映会が開かれる「アートギャラリー天神館」の内部



千葉 航太さん Ⅱ 平野 Ⅱ

「和紙っていいな」と
改めて気付かされた

岩手県から移住して、天神産紙に勤めて3年目になります。紙漉きは気温なども出来栄に影響する難しい作業。うまくできたときは、日々技術が身に付いていると実感できて楽しいですね。

映像を見て、いい風景、いい文化だと改めて思いました。紙の魅力を自分ではうまく言葉にできないけれど、烏谷さんの作品は美しい映像でそれを伝えてくれています。工場で最年長の宮脇さんが「和紙作りをつなぎたい」と語っていますが、年代は違ってその思いは僕も同じ——。和紙を手にしてくれる皆さんに「和紙っていいな」と思ってもらえるよう、良いものを作っていきたいです。



紙漉きをする千葉さん。微妙な感覚を頼りに厚みを揃えていく



〈映像作家〉Ko-ki Karasudani

本名・烏谷恒希さん=小田下=松山市出身。令和元年から小田地区を拠点に映像制作を始める。これまで4年間で約200本の作品を手掛けた



上映会 『紙の人びと』 Ikazaki Washi Craftman

●日時 3月11・12・18・19日
午前10時～午後6時

●場所 天神館（平岡甲1218）

●料金 500円

【問い合わせ】

Ko-ki Karasudani

✉ dahlia199537@gmail.com

リメイク版について「もっとその魅力を伝えたい」と話す烏谷さんに、天神産紙工場の皆さんと同じ職人魂を感じます。和紙を作るように、一つ一つの工程や一人一人の思いを丁寧に紡いだ作品だから、「なぜ手漉き和紙にぬくもりを感じるのか」までもが、伝わってくるような作品に仕上がりました。和紙職人と映像作家。ものづくりに向き合う異業種の若者たちが出会い、互いに刺激を受けて高め合っている姿に、まちの原動力のようなものを感じます。今よりもいいものを作りたい——。若い人たちのそんな思いが、町の未来をつくっていくのかもしれない。

『紙の人びと』のこれから

いくつもの手順を経てようやく完成する大洲和紙のように、職人たちの思いが重なり合って、映像という形になりました。そこに何を見るのか、烏谷さんは「見る人に委ねたい」と語ります。職人たちは作品をどう受け止めたのでしょうか。天神産紙工場の2人に、映像を通して感じたことを聞きました。